

令和2年3月31日(火)

校長室だより

第8号



感謝

新型コロナウイルス感染症による脅威が全世界に拡大し、人々の健康や日々の生活のみならず経済にも甚大な影響を及ぼしています。全国の小中高等学校では、一部の地域を除き3月2日から一斉に臨時休校の措置がとられ、学校はこれまでに経験したことのない状況に追い込まれました。3月30日現在で、4月から学校再開の方向で進んでいますが、通常の教育活動に戻るにはしばらく時間がかかりそうです。

極めて困難な状況である今こそ私たちは、一人一人が自覚ある行動をとり、すべての人々と協力していくことが求められています。加えて生徒の皆さんには、主体性とは何か、自立とは何かをしっかりと認識し、今このときにできることを見極めて取り組んでいくことが必要です。

臨時休校によって終業式が実施できなかったことから、ホームページに掲載する校長室だよりをもって終業式で皆さんに話す予定であった「感謝」について紹介します。

1か月ほど前までの皆さんは、いつもの時間に登校してクラスの仲間と挨拶を交わし、授業や部活動など一日の大半を学校で過ごした後に、自宅への帰路につく日々を送っていました。高校生であればこうした生活が一般的であり、そうした日常の中にある幸せに気づくこともなかったのではないのでしょうか。

例えば「学校で授業を受けることができる」「学ぶことができる」などは、当然のこととして受け止めてはいませんか。「部活動」や「体育祭、文化祭などの学校行事」が、先輩や後輩、同学年の仲間と一緒に自然に実施できる状況について考えたことがありますか。

日本には、小学校、中学校で学ぶ義務教育制度があり、高等学校、大学へと進学していくことも特別なことではありません。こうした環境にある日本では、教育を受けることがいかに恵まれているかに気づきにくいと言われていました。そのため、「学校で授業を受け、学ぶことができる」ことに意義を感じなくなり、学ぶ喜びや楽しさを実感できない人の割合が多くなっています。

私は以前、病弱の特別支援学校に勤務していたことがあります。その学校の児童生徒は病院に入院して院内学級やベッドサイドで授業を受けており、毎日の授業を心から楽しみに、かつ大切にしていました。朝の回診で体調が悪くても「勉強がしたい」と医師や看護師に申し出ることも多く、先生方がベッドサイドに出向き体調を見ながら授業を行っていました。病気治療をしている児童生徒には、当たり前のように提供される日常や健康、学校での学びが貴重で尊いものであることを十分に理解しているから、辛く苦しい状態であっても大切な機会を失いたくないとの思いが生じてくるのだと思います。

高校進学率が98.8%(平成31年度学校基本調査)という現下では、多くの高校生が高等学校に在籍し日々通学できることを必然と捉えがちですが、皆さんは高等学校で学べることの恩恵について考えてみる必要があるのではないのでしょうか。高等学校で学ぶことが当たり前と受け流すのではなく、**当たり前でできることへの喜びや幸せを享受し、高等学校で学べることへの感謝の気持ちを持ち続けることが大切です。**皆さんが高等学校で学べることは、保護者の皆様をはじめ数え切れない人たちの支援や協力のもと成り立っています。どうか、そのことを忘れないでください。

シドニーオリンピック女子マラソンで日本初の金メダルに輝いた高橋尚子*氏は引退会見で次のように語りました。

「マラソン選手は一人で走れるわけではありません。チームや支えてくださるスポンサーの方ももちろんですが、こうやってテレビ放送や報道があるからこそ、全国の皆さんが応援してくれるわけです。また、沿道で応援してくださる方や、沿道で整備してくださる方がいて、はじめてこのスポーツが成り立っています。もっともっと深く言えば、道路を作ってくださる方や整備してくださる方がいて、はじめてこのスポーツが成り立っています・・・本当に今までありがとうございました」

道路はマラソンのために作られているわけではありません。そのことを同氏は十分理解しつつも、道路があつてはじめてマラソンができることを平素から意識していたからこそ、引退会見の場でごく自然に道路関係者への感謝の意を口にすることができたのではないのでしょうか。

さて、皆さんはこれからの長い人生で、「困難に立ち塞がれる、突破する」ことを繰り返して生きていくはずですが、困難を突破したとき、または何かを成し遂げたとき、自画自賛する気持ちをグッと抑えて、まずは周囲への感謝の気持ちを抱くようにしてください。

たとえ皆さん自身の力で突破したことであっても、「皆さんのおかげです」と最初に切り出せば、自然と周囲への感謝の気持ちは増幅していきます。「自分」ではなく「自分たちで」、あるいは「協力があってこそ」と考えるようにしてください。感謝する心を持った皆さんのことを、人はまた支援しよう、協力しようと思ってくれるはずですが。

そして感謝の気持ちを持ち続けていけば、皆さん自身の心が豊かに満たされ、幸福感が高まっていくはずですが。

私たちは太陽のように自ら光を放つ存在ではなく、太陽の光を受けて輝く月のような存在と考えるべきではないでしょうか。学校や地域、将来参加する集合体の中で、私たちは他者から注がれる光によって輝いていることを忘れてはいけません。

皆さんが、感謝の気持ちを持ち続けることができる素晴らしい人として成長していくことを信じています。

さて、今回のホームページに掲載した校長室だよりをもって、私から皆さんへのメッセージは最後になります。本日付けで定年退職になります。皆さんの顔を見て話す機会がなかったことは心残りですが、杉戸高等学校を離れても皆さんが大きく成長していくことを心から願っています。

皆さんは素晴らしい力を持っています。自信を持って人生を力強く歩んでください。

杉戸高校での2年間の生活、生徒の皆さんをはじめ関係するすべての皆様に心から感謝申し上げます。校長室に飾っていただく私の写真は、在校生や卒業生、教職員、保護者の皆様、地域の方々への感謝と杉戸高等学校に在職させていただいた誇りを込めて撮影させていただきました。

2年間、本当にありがとうございました。

* 小出義雄氏の指導の下、マラソン選手としてオリンピック金メダリスト、元世界記録保持者、日本女子スポーツ選手初となる国民栄誉賞に輝きました。「Qちゃん」の愛称で親しまれ、現在はスポーツキャスター、マラソン解説者として活躍しています。

【おまけ】開花が早かった今年の桜も29日の雪の影響もあり、埼玉県では見ごろを終えました。プロ野球広島東洋カープを球団史上初のリーグ優勝に導いた名将の古葉竹識元監督の桜にちなんだ名言を紹介します。

「知床の千島桜は誰も見てくれない。それなのに毎年きちんと花をつけて乱れることがない。人が見ていても見ていなくても一生懸命やるのが練習だ。辛い練習も素晴らしい練習も人に見せるためではないんだ」

自分の努力や真剣さを一番よく理解しているのは、自分自身です。皆さんには決して自分自身を裏切らない人であってほしいと思います。